

氏 名	宋 侑珉
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第31号
学位授与日	令和元年9月30日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	視覚伝達デザインにおける新たな造形基礎教育の方法論研究 — C. S. パースによるセミオシスのデザイン教育への展開—
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 寺山 祐策 副査 武蔵野美術大学 教授 伊藤 誠 副査 武蔵野美術大学 教授 田中 正之 副査 武蔵野美術大学 客員教授 新島 実 副査 武蔵野美術大学 名誉教授 勝井 三雄

内 容 の 要 旨

本研究は、視覚伝達デザインにおける造形基礎教育の新たな可能性を探究するものであり、造形教育の事象を分析する方法として、記号的事象を連続的かつ総合的に記述する機能を持つC. S. パースが提唱した「セミオシス(記号作用)」理論を適用する意義を論じる研究でもある。

この研究を始めるにあたって、最初に取り組まなければならないのは、造形教育における「基礎」とは何かを考察することであった。この考察では、教育者の考えを推論する方法としてパースの「記号作用」に基づく記述方法を用いて、L. モホリ＝ナジの *The New Vision and Abstract of an Artist* のテキスト分析を行った。この分析を通じて、学生は自ら自身の活動範囲を拡張させる能力を持っている存在であり、教育者はこの能力の根底にある、人間の感覚活動分野における経験を顧みるべきであると考察した。そして、学生にこの基礎的な経験を新たに目覚めさせるためには、教育プロセスの中で「感覚」を覚醒させ、学生の成長段階にそって経験すべきものを段階的に提示することが重要であることを見出した。

そして、このような造形教育の在り方と共通する目的性を持っている教育プログラムを検証するため、学生の「視覚」を覚醒させ、視覚表現において経験すべき造形要素を提示してくれる具体的な教育手法を持っているイエール大学美術大学院の教育プログラムの実践を行った。実践する教育プログラムは、1980年代前半、当大学院のグラフィックデザイン専攻で行われていた授業を基にした「視覚の開発のためのプログラム」、「視覚意味論プログラム」、「色彩プログラム」である。この実践プロセスの全体的な流れを説明す

ると、最初に、視覚を通して対象から感じ取った曖昧で複雑な「視感覚」をコントロールする。次に形態の微細な変化を読み取り、その形態を成立させる原理を発見し、その原理に基づく空間構成を行う。そして、色が持つ象徴性を取り除き造形要素としての色を扱い、形態と意味の関係による視覚的イメージを作る。最後に光の現れ方である色そのものの属性を観察し再現する。さらに、これらの教育プログラムの実践プロセスをパースの「記号作用」理論を用いて分析した。この分析では、教育者と学生の複雑な相互作用によって現れてくる学生の感覚や認識の変化を詳細に言語化し、その変化をもたらした根本的な動機である教育プログラムの意図を推論したうえ、視覚伝達デザインにおける造形基礎教育の方法論として、学生が経験すべき段階を提示した。

このように「記号作用」理論に基づき考案した記述方法を用いて実践プロセスを分析することによって、造形活動における「感覚」という不明瞭な部分から発展する思考プロセスを明確にし、教育プロセスに現れる学生の変化、すなわち教育効果を分析することができた。この記述方法は、本研究で提示するもう一つの方法論として、その教育効果と教育プログラムの意図がどれくらい一致したのかを観察し、修正点や改善点を見直すことが期待できる。

本論文の構成は次のとおりである。

第1章において、造形教育における教育プロセスを記述する必要性について論じ、本研究の分析方法として用いるパースの「記号作用」の理論的背景と、「記号作用」の構成要素と構造体について述べる。

第2章では、パースの「記号作用」に基づいた記述方法を用いて、モホリ＝ナジの *The New Vision and Abstract of an Artist* のテキストの分析を行い、「感覚」を基盤とする教育方法の展開の教育的意義と今日性について論じる。

第3章では、モホリ＝ナジの教育理念と、本研究で実践するイエール大学美術大学院の教育プログラムの教育理念の繋がりについて論じ、その背景として、当大学院のグラフィックデザイン専攻の創設時期を取り巻く20世紀の代表的な教育者らの教育理念と出会いについて論じる。続いて第4章では、実践する三つの教育プログラムの教育内容を紹介し、実践順序の設定と方法について論じる。

第5章では、パースの「記号作用」の再考察に基づき「教育プロセスにおける学生の記号作用」の構造体を考案し、第6章で、この構造体を用いて、それぞれの教育プログラムの実践において、制作の完成に至るまで繰り返し行われた実践プロセスを詳細に記述し、さらにこの記述内容を基に改めて教育プロセスにおける学生の記号作用を分析する。

第7章では、第6章における分析内容を基に三つの教育プログラムの教育意図を推論し、その内容をまとめて、本研究における視覚伝達デザインの造形基礎教育の方法論として、造形思考の発展段階に基づく「視感覚の覚醒」、「形態の認識」、「形態と意味の関係」、「色の再現」を提示する。

第8章では、造形教育方法論の研究における「教育プロセスにおける学生の記号作用」

の記述方法の有効性について述べ、今後の研究課題である「教育プロセスにおける学生の記号作用」のプロセスを統合した「教育プロセスの全体像」の構造体について述べる。

審査結果の要旨

本研究は、視覚デザイン領域における造形基礎教育の新たな可能性を探究しその方法論を提示することを目的にしている。また造形教育の現場において教える側と教えられる側で発生する複雑で相互作用的な事象を分析する方法として、事象を連続的かつ総合的に記述する機能を持つ C. S. パースが提唱した「セミオシス（記号作用）」理論の適用を試みた点に大きな特色がある。

最初に「基礎」とは何かを考察するために、ラズロ・モホリ＝ナジが造形教育において人間が本来経験すべきものを段階的に提示することの重要性を示唆した『ザ・ニュー・ヴィジョン―ある芸術家の要約』のテキストを再解釈し、人間の知覚行為における「感覚」とは何か、そして「感覚」から拡張する能力を導くことの教育的重要性と今日性が考察された。そして教えられる側である学生を造形経験を通して自らの潜在能力の可能性に目覚めさせるためには、適切で明快な教育プログラムを通して具体的に「感覚」を覚醒させ、さらにそれらが学生の成長段階にそって段階的に提示されることが重要であることが見出された。

次にソンは上記で示された造形教育の目的と、学生の持つ「視感覚」を覚醒させ、視覚表現において経験すべき造形要素を与えるという点で共通性を持つ教育プログラムがイェール大学美術大学院の教育で行われていたのではないかと仮説推論し、その事実を検証するためにその教育プログラムの実践を自ら行うと共にこの教育機関が成立した歴史的背景について調査し考察している。実践されたのは、1980年代前半、当大学院のグラフィックデザイン専攻で行われていた授業を基にした「視感覚の開発のためのプログラム」、「視覚意味論プログラム」、「色彩プログラム」である。ソンはこれらを2年以上の時間をかけて行い、同時にそれらを「記号作用」理論を用いて詳細に記述し分析した。この分析では教える側と教えられる側の複雑な相互作用によって現れてくる教えられる側の感覚や認識の変化を言語化し、その変化をもたらした根本的な動機である教える側の教育プログラムの意図を推論したうえ、視覚伝達デザインにおける造形基礎教育の方法論として、教えられる側が経験すべき段階を提示している。

上記を通して、造形活動における「感覚」という不明瞭な思考を可能な限り明確にし、教育プロセスに現れる学生（＝教えられる側）の変化、すなわち教育効果を分析することが可能であることを彼女は示した。この記述方法は、その教育効果と教育プログラムの意図がどれくらい一致したのかを観察し、修正点や改善点を見直すことが期待できるという観点から大変画期的な手法である。また必ずしも視覚伝達デザイン領域にとどまらず広く

造形教育全般にも応用できる可能性を持ったものとなった。

本論文の構成は次のとおりである。

第1章において、造形教育における教育プロセスを記述する必要性について論じ、本研究の分析方法として用いるパースの「記号作用」の理論的背景と、「記号作用」の構成要素と構造体について述べられている。

第2章では、パースの「記号作用」に基づいた記述方法を用いて、モホリ＝ナジの *The New Vision and Abstract of an Artist* のテキストの分析を行い、「感覚」を基盤とする教育方法の展開の教育的意義と今日性について論じている。

第3章では、モホリ＝ナジの教育理念と、本研究で実践するイエール大学美術大学院の教育プログラムの教育理念の繋がりについて論じ、その背景として、当大学院のグラフィックデザイン専攻の創設時期を取り巻く20世紀の代表的な教育者（ナジ、ジョセフ・アルバース、アーミン・ホフマン、ポール・ランドなど）の教育理念との出会いについて論じる。続いて第4章では、実践する三つの教育プログラムの教育内容を紹介し、実践順序の設定と方法について論じている。

第5章では、パースの「記号作用」の再考察に基づき「教育プロセスにおける学生の記号作用」の構造体を考案し、第6章で、この構造体を用いて、それぞれの教育プログラムの実践において、制作の完成に至るまで繰り返し行われた実践プロセスを詳細に記述し、さらにこの記述内容を基に改めて教育プロセスにおける学生の記号作用を分析している。

第7章では、第6章における分析内容を基に三つの教育プログラムの教育意図を推論し、その内容をまとめて、本研究における視覚伝達デザインの造形基礎教育の方法論として、「造形思考の発展段階に基づく「視覚覚の覚醒」、「形態の認識」、「形態と意味の関係」、「色の再現」が提示された。

第8章では、造形教育方法論の研究における「教育プロセスにおける学生の記号作用」の記述方法の有効性について述べ、今後の研究課題である「教育プロセスにおける学生の記号作用」のプロセスを統合した「教育プロセスの全体像」の構造体について述べている。

(別綴じで「6章イエール大学美術大学院の教育プログラム実践プロセスの記述と分析」と「制作結果のポートフォリオ」が添えられている。)

公聴会の概要

本研究は2019年7月18日(木)10時～12時武蔵野美術大学 鷹の台キャンパス FAL (2号館1階)において公聴会が開催され発表と質疑応答が行われた。

以下審査概要

公聴会后2号館513教室において審査が行われた。

本研究は視覚伝達デザイン領域における基礎教育に関する研究としてその考察、理論共にこれまでにない徹底的な言語化と真摯な実践と分析が行われた点で大変重要な研究である。

本研究によるモホリ＝ナジの造形基礎教育の本質に関する再評価、再検討には今後のデザイン基礎教育に対する重要な示唆が含まれており重要である。またソンが論じたバウハウスおよびスイス、バーゼルのアーミン・ホフマンらの造形教育の試みがヨーロッパからアメリカに移動、交流した1930年代後半から50年代にかけて展開した美術史的事実には今後さらに考察、研究すべき重要な示唆が含まれている。

造形教育基礎において従来から行われていた曖昧な感覚批評や印象評価の多かった教育手法に対してパースのセミオシスの理論を用いることで、造形において展開している教える側と教えられる側の間で生じている現象を言葉と図像で記述し、シネキズム的な観点を与えた試みは、この手法が一般化されるかどうかは別としても大変重要なものである。

ソン自身によって多くの時間を費やしてなされた膨大な実践と展開、その記述は興味深くこの論文に強い説得力をもたらしている。

本研究は視覚伝達デザイン領域にとどまらず、広く造形基礎教育における有効性を持っているのではないかと、それらの領域においてもソンの組み立てた教育プログラムや記述手法が今後実践されることを望む。

以上のような意見が出された。また予備論文審査時に指摘されたいくつかの問題、テキストと図像の配置が不適切な部分、翻訳文に関するチェック、記号論の概念説明の明確化などが修正されているかが問われ、微細な誤字等を除けば、全て修正されていることが確認された。

以上の審議を経て最終的に合格の判断がなされた。